台大日本語文研究第 29 期
2015 年 6 月，頁 75-101
2015-03-04 收稿，2015-05-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2015.29.75

通俗文藝與作家 / 讀者的欲望
―以《臺灣鐵道》福田昌夫作品為例―

河尻和也*

摘要

1908 年台灣縱貫鐵道全線通車。1912 年台灣總督府設立了台灣鐵道會。此台灣鐵道會於 1912 年 7 月 15 日始出版機關雜誌《台灣鐵道》；並於 1936 年改組為財團法人台灣鐵道協會。然而此協會仍以《台灣鐵道》為機關雜誌繼續發行。雜誌《台灣鐵道》於 1944 年改名《いしずゑ》(礎石)，之後仍一直持續發行到 1945 年。

論文中，以刊載於《台灣鐵道》的通俗文藝作品，主要以福田昌夫自 1930 年代至 1940 年代發表的通俗文藝作品為研究對象。前行研究指出，福田昌夫的創作是「為滿足讀者娛樂興趣」、「解除讀者壓力」的通俗文藝作品。筆者認為福田昌夫的創作內容並不僅止於此。換言之，筆者認為從福田昌夫的創作內容可以窺見自 1930 年代至 1940 年代，日治時期居住於臺灣的作者與讀者所具有的某種「欲望」及或「幻想」。本論文擬透過《台灣鐵道》中福田昌夫的文本以及創作之時代背景，考察當時作者與讀者對殖民地臺灣各種面相的觀點、並針對文本中作者與讀者的各種「欲望」及或「幻想」等問題進行分析。

關鍵詞：福田昌夫、《台湾鉄道》、通俗文藝

臺灣大學學術期刊資料庫

* 虎尾科技大學應用外語系助理教授

Popular Literature and Desires of Its Writers/Readers: Exemplified by Fukuda Masao's Works Published in *Taiwan Railway*

Kawajiri, Kazuya*

Abstract

In 1908, the north-south railway in Taiwan was fully opened to traffic. In 1912, Taiwan Governor established the Taiwan Railway Society, which started to publish the magazine *Taiwan Railway* in the same year. The magazine was renamed "Ishizue" in 1944 and continued being released until 1945.

This thesis mainly studies Fukuda Masao's popular literature works published in the *Taiwan Railway* from the 1930s to the 1940s. The previous researchers indicated that Fukuda's popular literary works had been created "to satisfy readers' interest in entertainment" and "to relieve readers' pressure". I believe that his creation content meant more than that. In other words, through his works, we can get a glimpse of certain "desires" held by the authors and readers from the 1930s to 1940s who lived in Taiwan during the Japanese-ruled period. This paper, in view of Fukuda's creative text in the "Taiwan Railway" with its historical background, intends to investigate the varied viewpoints of the writers and readers toward colonial Taiwan at that time, and to analyze such issues as the various "desires" held by them.

Keywords: Fukuda Masao, *Taiwan Railway*, Popular literature

臺灣大學學術期刊資料庫

* Assistant Professor of the Department of Applied Foreign Languages, National Formosa University

通俗文芸と作者／読者の欲望
—『台湾鉄道』における福田昌夫の作品を中心として—

河尻和也*

要旨

1908 年、台湾では台湾縦貫鉄道が全通し、1912 年になると台湾鉄道会が設立された。台湾鉄道会は 1912 年 7 月 15 日より月刊の機関紙として『台湾鉄道』を発行する。『台湾鉄道』の発行母体でもある台湾鉄道会は、1936 年に財団法人台湾鉄道協会へと発展する。しかしながら『台湾鉄道』は発行が続けられ、1944 年には雑誌の名称を『いしずゑ』と変更しながらも終戦間際まで出版が続いた。

本論文では『台湾鉄道』に掲載された通俗文芸作品の中でも、特に福田昌夫が 1930 年代から 1940 年代にかけて執筆した作品を分析の対象とする。これまでにも述べられているように、福田昌夫は通俗小説といった「面白さで読者に迎合する」「肩のこらない」作品を描いていた。一方で、その作品に描かれた内容は、1930 年代から 1940 年代という日本統治時代の台湾に暮らした作者／読者の、ある種の共通した欲望／幻想を表しているとも言える。本論文では、『台湾鉄道』に掲載された福田昌夫の作品の分析を通して、作者／読者がいかに植民地台湾を捉えていたのか、そして彼らがいかなる欲望／幻想を持っていたのかを考察する。

キーワード：福田昌夫、『台湾鉄道』、通俗文芸

臺灣大學學術期刊資料庫

* 虎尾科技大學應用外語系助理教授

通俗文芸と作者／読者の欲望
―『台湾鉄道』における福田昌夫の作品を中心として―

河尻和也

一、はじめに

1908 年、台湾では台湾縦貫鉄道が全通し、1912 年になると台湾鉄道会が設立された。台湾鉄道会は、1912 年 7 月 15 日より月刊の機関紙として『台湾鉄道』を発行する。『台湾鉄道』の発行母体でもある台湾鉄道会は、1936 年に財団法人台湾鉄道協会へと発展する。しかしながら『台湾鉄道』は発行が続けられ、1944 年には雑誌の名称を『いしずゑ』と変更しながらも終戦間際まで発行は続いた。

中島利郎氏（以下敬称略）が『「台湾鉄道」作品集』の「雑誌「台湾鉄道」解説」で述べているように、機関紙『台湾鉄道』には、1912 年の創刊当時、鉄道事業に関する論説や、評論、資料、講話など学術的傾向を持つ記事が掲載されていた[1]。また、中島は『台湾鉄道』に掲載された文芸作品を、鉄道従事員作家による前期作品群、著名文芸家が紙面を飾る後期作品群とに分類している。そしてその中でも、『台湾鉄道』に掲載された前期の作品を「面白さで読者に迎合」する娯楽本意の通俗小説が主であるとし、また後期に至っても「肩のこらない」娯楽を主とした作品が提供されることは変わらなかった、と述べている[2]。

確かに『台湾鉄道』に掲載されている作品は、鉄道物、恋愛物、出世物、探偵物など娯楽趣味を満足させるための作品、いわゆる通俗小説である。また、中島の述べる「面白さで読者に迎合」する娯楽本意の通俗小説とは、逆に考えるならば読者が読みたいと欲望する内容を描いた文芸作品であると言えよう。『台湾鉄道』は商業誌

[1] 中島利郎「雑誌「台灣鐵道」解説」（中島利郎編『「台灣鐵道」作品集（一）』、東京：緑蔭書房、2007 年）pp.379-392。
[2] 同上。

臺灣大學學術期刊資料庫

ではないものの、それは佐藤卓巳が菊池寛の言葉を引用しつつ「純文芸は生産中心の「送り手のコード」によって、大衆文芸は消費中心の「受け手のコード」によって生み出される」と述べているのにも重なる[3]。それでは『台湾鉄道』の作者／読者とはいかなる人々であり、その作品からはいかなる欲望を読み取ることができるだろうか。

先述したように『台湾鉄道』は鉄道部の機関紙であり基本的には鉄道部の職員が作者／読者であった。しかしながら『台湾総督府統計書』を見ると、当時『台湾鉄道』は台湾島内以外にも内地（日本）[4]、朝鮮、満州、支那（中国）、海外（アメリカなど）に配布されていたことがわかる。また発行部数に関して言うならば、創刊号の2000部を始めとして、最終的な記録のある1939年12月には、1か月に8127部が発行されていた[5]。雑誌の性質上、単純に比較することはできないが、同時期に発行されていた文芸雑誌『風月報』が月に1900部程度 、『台湾文学』と『文芸台湾』が3000部であることから比べても[6]、『台湾鉄道』の発行部数と読者数は相当多かったことが理解されよう。恐らく『台湾総督府統計書』における『台湾鉄道』創刊号からの発行部数の推移から見て[7]、その後も廃刊までに発行部数は1万部程度まで伸びたと考えられる。また、会員数も創刊時の1365人を始めとして、記録がある1932年には3399名と大幅に増加している[8]。『台湾鉄道』は鉄道部の会員が手にし、当時の日本

[3] 佐藤卓巳『『キング』の時代－国民大衆雑誌の公共性』、東京：岩波書店、2002年 p.24。佐藤が引用した菊池寛の言葉は「作家が書きたくて書いてゐるのが、純文芸で、人を悦ばすためにかいてゐるのが大衆文芸だ」というもの。

[4] 本論文で内地とは日本統治時代の日本「内地」を指す。また内地人とは日本人を指す。本島人と記した場合、特別な記述が無い限り、日本統治時代の台湾に住む漢人を指す。

[5] 台湾総督府統計書『台湾総督府第四十三統計書』、台北：台湾総督府、1939年。

[6] 藤井省三「〈大東亜戦争〉期の台湾における読書市場の成熟と文壇の成立―皇民化運動から台湾ナショナリズムに至る道」（下村作次郎ほか編『よみがえる台湾文学―日本統治期の作家と作品』、東京：東方書店、1995年）pp.84-88。

[7] 台湾総督府統計書『台湾総督府第十六統計書』～『台湾総督府第四十三統計書』台北：台湾総督府、1912年-1939年。

[8] ちなみに1932年当時の鉄道部の職員数は、内地人5474人、本島人4361人、総数9836人である。台湾総督府鉄道部編『台湾鉄道要覧－昭和15年3月版』、

臺灣博碩士學學術期刊資料庫

の植民地などに送られていた以外にも、紙面からは当雑誌が駅事務室に置かれたり、さらに日本統治時代末期には皇軍兵士に慰問として送られていたことがわかる[9]。このような事実からすれば、実際の読者の数は会員総数よりも多かったのではないかと想像される。また『台湾鉄道』に作品を発表した作家は数名を除いてほぼ日本人(「内地人」)であり、その読者に関しても多くは日本人(「内地人」)であったと考えられる[10]。

それでは、『台湾鉄道』に掲載された文芸作品からは、作者／読者のいかなる欲望を読み取ることができるだろうか。本論文では『台湾鉄道』に掲載された通俗文芸作品の中でも、特に福田昌夫が 1930 年代から 1940 年代にかけて執筆した作品の分析を中心として、当時の『台湾鉄道』の作者／読者がいかに植民地台湾を捉えていたのか、そして彼らがいかなる欲望を有していたのかを考察する。

二、福田昌夫と『台湾鉄道』

福田昌夫は台湾総督府交通局鉄道部の職員である。これまでに、彼の個人的な経歴については、全くと言ってよいほどわかっていない。しかしながら中島利郎も述べるように『台湾鉄道』の従事員作家の中で、福田昌夫の執筆した作品は、その読者を引き付けるストーリ展開などで群を抜いている[11]。福田昌夫の作品についての先行研究には、福田昌夫の二篇の探偵小説「二将軍の壁画」(1935)および「魔の椅子事件」(1935)を中心に分析を行った横路啓子の「植民地台湾的探偵小説論—福田昌夫を例に」、所収『日本語日本文学』輔仁大學(2014)がある。横路は当論文において、植民地台湾で描か

台北：台湾総督府交通局鉄道部、1940 年、図表 3。

[9] 著者不明「本誌を慰問に」(台湾鉄道協会編『台湾鉄道』340 号、台北：台湾鉄道協会、1940 年 10 月) p61。原文に著者名が記されていなかった為、著者不明とした。

[10] 筆者の調査によれば、1912 年から 1945 年までに『台湾鉄道』で作品を発表した作家は、そのほとんどが日本人である。例外として柯設偕、荘慶記、龍瑛宗、周金波、楊雲萍、張文環、徐振宗らが数篇の作品を発表している。

[11] 前掲、中島利郎「雑誌「台灣鐵道」解説」(中島利郎編『「台灣鐵道」作品集』2007 年)。

臺灣學術期刊資料庫

れた探偵小説から、台湾ならではのいかなる特徴が読み取れるだろうかという問題を中心に考察を行っている。そして、福田昌夫は自らが統治者として生きる台湾という土地で、いかなる探偵小説を書いたのか、その作品にはどのような意識が現れているのか、という点を分析する。横路の研究では、福田昌夫の作品から欧米と日本の探偵作家および探偵小説の影響が見られること、作家の統治者意識が見られること、謎解きに文化人類学的視点（台湾の民族風習や文化といった知識）が用いられていることなどが分析されている。

筆者も基本的に横路の意見に同意であり、当論文からは多くの示唆を与えられた。一方で、福田の統治者意識については横路の述べる「秩序が乱れるコミュニティには常に台湾人世界が選ばれ、それを回復させるために役割として日本人が設定されている」（p.62）以外にも、さらなる考察の余地があるのではないかと考える。また文化人類学視点についても、台湾の習俗、人種的問題などについて、さらに考察を深めることができるのではないかと考える。

本論文では、福田昌夫の小説「二将軍の壁画」（1935.2-3）、「魔の椅子事件」（1935.8-12）、「港町の殺人」（1935. 4-6）を中心に分析を行い、それぞれの作品に見られる作者／読者の欲望について考察する[12]。ちなみに「港町の殺人」（以下「港町」）は、「二将軍の壁画」（以下「二将軍」）と「魔の椅子事件」（以下「魔の椅子」）の間に発表された作品である。しかしながら、分析の関係上、まず「二将軍」と「魔の椅子」の分析を行い、その後で「港町」の考察を行う。

三、「二将軍の壁画」について

（一）1930 年代の台湾

「二将軍の壁画」は、福田昌夫が 1935 年 2 月と 3 月に『台湾鉄道』に発表した探偵小説である。当小説では日本人（「内地人」）のアマ

[12] 当論文で扱う福田昌夫の作品の内、「二将軍の壁画」、「魔の椅子事件」、「港町の事件」、「若き者の領域」については、前掲（中島利郎編『「台灣鐵道」作品集（一）、（二）』、東京：緑蔭書房、2007 年）収録のテクストを用いる。福田の他の作品を引用する場合、雑誌『台湾鉄道』収録のテクストを用いる。

臺灣大學學術期刊資料庫

チュア探偵真田九郎が、同じく日本人（「内地人」）である K 弁護士と共に、裕福な台湾人（「本島人」）家庭陳家の遺産相続の問題を解決する。横路が述べるように、探偵真田九郎にはアルセーヌ・ルパンやシャーロック・ホームズの影響が見られる。また、当物語の時代設定は、物語に登場する陳文明という青年の年齢から考えて 1930 年であることがわかる[13]。筆者は「二将軍」を含め、福田昌夫の作品を分析する際、その時代設定、時代背景が重要であると考える。そのため、ここで簡単に 1930 年代の台湾がいかなる時代であったかを考えてみたい。

1930 年代の台湾は日本資本主義の新たな消費市場となった時期であった。航路、鉄道、道路など島内・島外を連結する交通手段は整備され、日本「内地」からの観光客も台湾を訪れるようになった。また、新聞、雑誌などのメディアも台湾人の生活と深いかかわりを持つようになり、若い女性は和服や洋服チャイナドレスを好んで着るようになる。そして本島服、台湾服は「年配者」が着る「旧式の服装」を指すものとなった[14]。またこの時代の特徴として、それまでは上流階級および知識人のサロンであったカフェーが大衆化した時代でもある[15]。そして 1930 年代半ばには、日本の植民地統治の「成功」を内外に知らしめるための、台湾施政 40 周年紀念博覧会が台北にて開催された。

このように 1930 年代の台湾とは近代化が進む一方で、日本が第二次世界大戦に向けて、着実に軍国主義化してゆく時代でもあった。台湾では、1930 年の霧社事件の影響を受けて島内の社会運動は大打撃を受ける。翌 1931 年には満州事変が起こり、1937 年には日中戦争勃発した。そのため、1930 年代の台湾ではインテリが文学の創作

[13] 陳文明の生年月日が明治 42 年（1909 年）4 月 4 日。物語で文明の年齢が二十一歳とあるため、物語は 1930 年であると理解される。
[14] 洪郁如「植民地台湾の「モダンガール」現象とファッションの政治家」（伊藤るり他編『モダンガールと植民地的近代』、東京：岩波書店、2010 年、pp.261-267）および、曽山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』（東京：青弓社、2003 年）を参考とした。
[15] 廖怡靜『女給時代』台北：東村出版（2012）p.15。

臺灣大學學術期刊資料庫

を以って比較的穏健な抵抗を行うこととなった[16]。こういった当時の時代背景は、福田昌夫の作品に大きく影響を与えており、作中には近代や文明を表す記号として、シガー、カフェー、コーヒー、チェアー、タクシーといった単語が多々登場する。

（二）探偵真田九郎の両義性

まず「二将軍」を一読してわかることは、この作品で福田が明確に「文明」「近代」「法」に属するものと、「非文明」「旧社会」「法の外」に属するものとを書き分けていることである。例えば、探偵の真田九郎、K 弁護士といった日本人（「内地人」）は、基本的には「文明」「近代」「法」に位置し、「旧社会」に起こった問題を「近代的知性」によって解決する役割を果たしている。また、後に詳述するが姓に「陳」、名前に「文明」を有し、日本「内地」で早稲田の高等学院に留学している陳文明は、その姓と名が示すとおり「伝統」と「近代」の狭間に存在する人物として設定されている。彼は「内地人と殆ど變わらない程の巧な日本語」（p.176）を操ることができ、Y カフェーで真田と出会う。

ここで、まず探偵小説の構造、および探偵真田九郎について考えてゆきたい。これまでの研究でも述べられてきたように、探偵小説とは近代文明、法律、犯罪が発達した後に発生した文学形態である。そのため、探偵小説の成立には市民社会や法律、裁判制度、警察組織の整備、そして人々が科学的な思考に慣れ親しんでいる必要がある[17]。先述したように、1930 年代の台湾は、都市化・近代化が進んだ時代であり、すでに探偵小説が描かれる下地は出来上がっていた。

探偵小説では、事件に見舞われた人々の日常生活は一時的に混乱に陥る。しかしながら、探偵や警察による捜査・解明によって事件は解決し、世界は再び平穏な世界に立ち戻る[18]。よって探偵小説と

---

[16] 河原功『台湾新文学運動の展開』、東京：研文出版社、1997 年、p.236）を参考とした。

[17] 荻野雄「探偵小説の哲学（1）－ジークフリート・クラカウアーの出発点」『京都教育大学紀要』105（2004 年）p.41。

[18] 内田隆三『探偵小説の哲学』（東京：岩波書店、2001 年、pp.37-38）を参考とした。

臺灣大學學術期刊資料庫

は探偵や警察が市民社会に存在する不安を解消する、つまりは無秩序の状態を、安定した秩序ある状態に戻すといった、基本的に権力の側に立った物語構造を有している。

次に探偵真田九郎のパーソナリティーの両義性について考えてみたい。世界最初の探偵小説『モルグ街の殺人』の犯人は、植民地ボルネオ島からイギリスの市民社会に運び込まれた「野蛮」――オランウータンであった。このような場合、未知なる外部からの侵入者に対して、市民社会の内部に属する法の支配(警察権力／公的権力)では対抗できない。その時に登場するのが、それを宥める役――市民社会、文明社会に所属しながら、「法の外」の事件にも眼を光らせることができる―「祭司王」[19]としての探偵なのである。そのため探偵は、物語全体としては権力の側に位置しながらも、そのパーソナリティーには「どこか異常な「奇癖」があったり、社会的な標識としてもアウトサイダーの位置が与えられている」ことが多い[20]。つまり探偵とは秩序と無秩序、双方のパーソナリティーを有していると言える。探偵小説では、物語の最後に犯人は何らかの方法で罰を与えられ、合法的秩序は回復される。しかしながら、探偵の目的は法のために捜査を行うのではなく、謎解きそのもののために謎を解くのである[21]。

「二将軍」の主人公探偵の真田九郎もそういったパーソナリティーを受け継いでいる。そのため、彼にとって事件の解決は重要ではない上に（彼は「二将軍」「魔の椅子」の二作品に登場するが、事件が解決するとすぐにその場を後にする)、「二将軍」「魔の椅子」両事件では、過去の犯罪を見逃したりもする。また、真田が「近代的知

[19] 祭司王とは、外部に由来する暴力的な力を儀礼的に宥め、外部的な力を内部を支配する観念的威力に転化し、その禍々しい姿を背負いながら共同体に君臨する存在である。笠井潔は、探偵小説における探偵とは、太古の祭司王の役柄を継承するように、内部＝市民社会と外部＝植民地が接触せざるをえない特異点に身を置いた存在である、と述べている。笠井潔『探偵小説論序説』(東京：光文社、2002 年、p.70）を参考とした。

[20] 前掲、内田隆三『探偵小説の哲学』（2001 年）p.31。

[21] 荻野雄「探偵小説の哲学（2）－大衆文化の解読」（『京都教育大学紀要』105、2004 年 p.54）を参考とした。

臺灣大學學術期刊資料庫

性」に長けているのみならず、台湾語に通じていたり、植民地台湾の習俗や文化に詳しいのは、彼が、植民地の「旧習」や「野蛮」といった、ともすれば日本人（「内地人」）にとっては未知なるものであったり、「法の外」に存在する物に対応、対抗する必要があるからなのである。

（三）「非文明」、「旧社会」、「法の外」

次に「非文明」「旧社会」「法の外」に分けられた人々を見てゆこう。陳家の人々は、早稲田の高等学院に学ぶ陳文明以外は皆、基本的には「非文明」「旧社会」に属しているということができる。彼らは意地が悪く、姑息な人物として描かれている。

まず、陳家の当主である陳家城は「本島人は勿論内地人までに手を」（p.171）延ばすような「横暴を極めた」（p.173）人物である。彼には正妻の妻から生まれた長男文明の他に、「女工上がりの後添ひから出来た」（p.172）三元という次男がいる。ちなみに、この三元という男は、傷害罪を二回と恐喝罪を一回起こしているが、その罪は金の力で表沙汰になることはなかった。また、福田によって、三元は「譯も判らず權利のみを主張する左傾分子」（p.174）と書かれている。このような描写からは、この作品が 1930 年代の社会運動弾圧期の台湾を背景として描かれていること、そして福田が「本島人」の「左傾分子」を否定的、かつ「法の外」の存在として捉えていたことが理解される。また、陳家では当主陳家城の死後、後妻の呉氏一枝が、支配人王悪の情婦となり家の遺産を狙っている。他にも「三原色を使つて**毒々しい感じ**」（p.185：強調部筆者）を与える壁画を描いた「支那人」の絵師も、このカテゴリーに位置づけられる人々である。また、「支那人」によって描かれた謝将軍と范将軍の壁画は、中国の伝統文化を象徴していると言えるだろう。

「二将軍」の物語では、「非文明」「旧社会」「法の外」に属し、「旧習」にまみれた生活を送る資産家の台湾人（「本島人」）一家に発生した問題を、「文明」「近代」「法」に位置する、日本人（「内地人」）探偵真田九郎が「科学的」「近代的」な知識を以って解決する。また、

臺灣大學學術期刊資料庫

中国文明に属する「支那人」によって描かれた壁画の謎が、日本人（「内地人」）である真田の「近代的知性」によって解かれるという構造は、過去に栄華を極めた中華文明が凋落し、すでに日本文明によって解釈されるものとなったことを示していると言えよう。

最終的に物語は解決し、呉氏一枝たちは陳家の遺産を手にするが、真田の助けにより、陳文明はより多くの大金を手にすることとなる。ちなみに「横暴を極めた」（p.173）陳家城は、後妻に裏切られすでに悲惨な最期を迎えている。この結末が示しているのは、日本のそして「文明」「近代」的な知識の優越性である。また、ここで興味深いのは、当初、早稲田の高等学院で学んでいた陳文明が、現在は東京帝国大学に通っているというエピソードが加えられているということである。つまり、物語の当初「伝統」と「近代」の狭間に存在していた陳文明は、最終的には「旧社会」を捨てて、帝国の知を象徴する東京帝国大学に入学するのである。こういった陳文明の行動が表すものは「文明」「近代」「法」の肯定であり、「非文明」「旧社会」「法の外」といったものの否定であることは言うまでもない。「二将軍」という物語の内容／構造からは、以上のような作家の欲望を読み取ることができる。

先述したように、1930 年代の台湾は交通機関が整備されるなど、近代化が達成され、日本による植民地統治も安定期に入った時期であった。当時、植民地に住む「内地人」は、自らが「文明化」を達成したこと、そしてその「優越性」を誇った。それを象徴する様に、この作品が発表された 1935 年には台湾施政 40 周年紀念博覧会が開催されている。このような「文明」「近代的知性」の優越、そして「非文明」「野蛮」の否定といった視点は、当作品の中で明確に記されている。そしてそれは、正に当時の「内地人」の作者／読者が見た幻想であり、彼らが持った欲望でもあったのである。

四、「魔の椅子事件」について

（一）潘家と「熟蕃」

臺灣大學學術期刊資料庫

次に福田昌夫が 1935 年 8 月から 12 月にかけて連載した「魔の椅子事件」について考えてゆきたい。この物語の時代設定は、作中で潘吉祥の姉碧霞が「二将軍」の遺産相続事件に言及していることから、1930 年代であることがわかる。またこの物語も、基本的には「二将軍」と同様、日本人（「内地人」）探偵の真田九郎が「近代的知性」を以って潘家に伝わる椅子の謎を解くというものである[22]。

しかしながら、この物語で特徴的なのは、真田が訪れる潘家が「純粋な台湾人ではない」（p.228）「熟蕃」[23]の末裔と設定されていることである。潘家はすでに漢化されているが、その姓や名前は特徴的である。まず、家に伝わる「魔の椅子」についての調査を依頼をする潘家の青年、潘吉祥について考えてみたい。潘吉祥の姓「潘」であるが、語り手により「この藩といふ姓は純粋の台湾人ではない熟蕃の子孫」（p.228）であって「潘といふのは清朝から与えられた彼等の光輝ある名」（p.228）だと述べられている。実際に戴文鋒の研究によれば、平埔族の「熟番」は清朝から様々な姓を受け取ったが、その中で最も多かったのが「潘」であった[24]。ちなみにこの「潘」という漢字は、字の形としては「蕃人」の「蕃」に近い。そして潘家について言うならば、潘家の人々は皆以前「蕃人」（生蕃）であったことを示す「潘」という姓に、吉祥、碧霞、玉涼といった中華系の名がつけられている。これは台湾人（「本島人」）社会に起きた事件を描いた「二将軍」とは異なっている。

ここで「熟蕃」について少し考えてみたい。1902 年、台湾では「台湾住民」とは誰か、「生蕃」を「台湾住民」というカテゴリーに入れるべきかどうか、という議論が起こった。結局、「生蕃」は「台湾臣民」ではないという結論となり、植民地政府は「漢民族」と「熟蕃」

[22] 潘家に伝わる椅子の謎とは、家督を継ぐものが椅子の上で死ぬことになるというもの。
[23] 本文中では、台湾の先住民族を表す際、福田昌夫のテクストに準じ「蕃人」「生蕃」「熟蕃」という用語を使用する。
[24] 戴文鋒「賜姓政策」『臺灣原住民族歷史語言文化大詞典』。http://210.240.125.35/citing/citing_content.asp?id=1823&keyword=%BD%E7%A9m%ACF%B5%A6（2015 年 2 月 10 日閲覧）。

臺灣大學學術資料庫

のみを事実上の「帝国臣民の状態」にあるものとした[25]。しかしながら、詹素娟の研究にもあるように、当時「熟蕃」の人々は行政的には帝国臣民とされたものの、彼等は「生蕃」でもないが「漢人」でもない、「非漢人」という境界線上の存在として位置づけられた[26]。つまり、「熟蕃」の人々はいかに「漢人」と似ていても、その境界線を越えることはできなかったのである。ちなみに詹素娟は、日本統治時代に「熟蕃」とされていたクバラン族の調査の経験から、「漢人」と「非漢人」といった境界は表面的には見えずとも、現在（2004 年時点）においても依然として存在していると述べている[27]。また、1931 年、移川子之蔵は『南方土俗』掲載の随筆「頭社熟蕃の歌謡」において、当時「熟蕃」の人々が「熟蕃と認識さるゝことすら嫌ふ」（p.137）と書いている[28]。つまり「熟蕃」であった彼等は、自分たちが「漢人」でもなく、さらに「生蕃」でもない、境界線上の存在であると認識していたことがわかる。そして「熟蕃」の名残を残した姓に「漢人」の名がつけられた潘家の人々も、その姓と名が示すとおり正にその境界線上に生きる人々であった。さらに重要なのは「魔の椅子」において潘家で発生した事件の原因とその解決には、彼らが「熟蕃」の末裔であったことが大きく関係していることなのである。

（二）「魔の椅子事件」考察

1. 潘家に住む人々

先述したように「魔の椅子」において、潘家の人々は「近代」と「伝統」の狭間で生きることの上に、自分たちが「漢人」と「非漢人」の境界線上に生きることに苦しんでいる。ここで潘家の人々がいかに描かれているかについて考察を行いたい。

まず、自家に伝わる「魔の椅子」のため、日本「内地」での生活

---

[25] 松田京子『帝国の思考』（東京：有志舎、2014 年）を参考とした。
[26] 詹素娟「日治初期臺灣總督府的熟番政策－以宜蘭平埔族為例『臺灣史研究』第 11 巻 1 期（2004 年）pp.74-75。
[27] 同上。
[28] 移川子之蔵「頭社熟蕃の歌謡」（南方土俗學會編『南方土俗』、台北：新高堂書店、1931 年）p.137。

臺灣大學學術期刊資料庫

を切り上げて船で台湾に戻る潘吉祥である。彼は「内地」で教育を受けており、流暢な日本語を話す青年である。彼は「近代的知識」を学んでいる一方で、自家に伝わる椅子が代々、家督を相続する者を死亡させるという不安に頭を悩ませている。また、彼は「僕達は永久に先祖の罪の償ひのために我々子孫が貴重な生命を捧げて行かなければならないものだと思ひます」（p.219）と述べている。潘吉祥がここで述べる「先祖の罪」とは、彼の祖先がもともとは「野蛮」な「蕃人」(「生蕃」）であったという「罪」である。また、吉祥の兄である潘遠は、生前「媳婦仔」の習慣を廃止したいと考え、論文を発表するといった進歩的な青年であった。しかしながら結局は、彼も彼の父親や祖父と同様、椅子に殺されている[29]。

他にも、当物語のヒロインとも言える潘吉祥の妹潘氏愛[30]は、流暢な国語（日本語）を話す女性として設定されている。彼女は台北の女学校を卒業し、内地風を好み、和服を着こなし、時には「台湾服の下にチェッカー模様の短いスカート」（p.240）を履きこなす。つまり、彼女は「近代化」「文明化」された女性として描かれているが、一方でやはり「近代」と「伝統」の狭間で苦しんでいる。潘家には他にも母親、養女阿妹などが一緒に暮らしているが、彼女らは潘吉祥兄弟とは別に「伝統」的な生活に生きる人物として設定されている（姉夫婦はすでに潘家を出て暮らしている)。

対して「近代的知性」を有し、「不可思議といふことは實際此の世には存在しない」（p.225）と言い切る真田九郎は、潘家に存在する「非文明」「旧社会」「法の外」「野蛮」といった「禍」を「祭司王」[31]としての立場で宥めてゆく。真田は潘吉祥の母親が話す台湾語を全て理解している。その理由は彼が「非文明」「旧社会」の事件に対

[29] 潘遠の死は実際には別の理由があり、やはり真田によってその真相が明らかにされる。

[30] 福田昌夫は潘氏愛が初登場する際、彼女に「妹です、潘氏愛と云ひます」(p.232)と語らせている。彼女の名前は恐らく潘愛であると考えられる。しかしながら、福田は真田や語り手の「私」に、彼女を「潘氏愛」と「愛さん」両方の名前で呼ばせている。そのため、本論文で彼女の名前を使用する際には「潘氏愛」で統一することとした。

[31] 「祭司王」については、注 20 を参照されたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

応するためには、このような知識を身につけていることが必要だからである。

2. 潘家とその「罪」

次に潘家の家屋や先祖の部屋がいかに描かれているかを考察し、椅子がいかに潘吉祥を殺そうとしたのかを考えてゆきたい。

「魔の椅子」において、潘家は新竹の中壢駅から 3 時間ほど離れた沙荘という「熟蕃」部落に位置していると設定されている。真田らを乗せたボロタクシーは、途中車が故障をしながらも何とか潘家のある「熟蕃」部落にたどり着く。その場所は、語り手により「あまりに淋しい田舎風景」（p.230）であったと表現されており、潘家が 1930 年代台湾の近代的都市空間とは対照的な場所として位置づけられていることがわかる。

潘家は母屋と本島式の屋敷からなっている。屋敷は、天井や壁、床などが洋風に改装してある一方で、「急に時代が三、四十年も逆行したやうな感じがして恐ろしく孤獨な淋しい氣持ちになる」（p.231）とも描かれており、潘家が「近代的」「文明的」な側面と、「伝統的」「非文明的」な側面を有していることがわかる。このような潘家家屋の様相は、そこに暮らす潘家の人々と対応していると言えよう。

次に問題の椅子が置かれている祖先の部屋について見てゆこう。祖先の部屋は語り手の「私」により「この部屋の暗さはどうだらう、何百年も光りを受けたことのないやうな陰惨な空氣を抱いてゐる」（p.246）と表現されている。そしてその部屋には「蕃人」（「生蕃」）の彫った「幼稚な原始的な彫像」（p.248）や、彼らが戦いに用いたとされる槍や銃といった武器が置かれている。また椅子については、潘吉祥自身の口から、それが近代的なものではないことが強調されている[32]。部屋を出た語り手の「私」が、その部屋を評して「惡魔の住家」（p.249）と表現していることからもわかるように、部屋とそこに置かれた事物は、福田昌夫により「非文明」「旧社会」「法の

[32] 福田昌夫「魔の椅子事件」、前掲（中島利郎編『「台灣鐵道」作品集（一）』、2007 年）p.218。

臺灣大學學術期刊資料庫

外」「野蛮」を表すものとして描かれていると言って間違いが無い。

最終的に「魔の椅子」では、真田九郎が祖先の死の原因を「胸腺淋巴体質」にあると突き止める。つまり物語は探偵真田の「近代的知性」により、「非文明」「旧社会」「法の外」「野蛮」に存在する謎は解明され、無秩序は秩序の状態に戻される[33]。

しかしながら忘れてならないのは「胸腺淋巴体質」により発作を起こした潘吉祥が、先祖の部屋の椅子に座って見た幻とその内容とである。真田は潘吉祥の発作の起こった原因についてこう指摘する。

> 今迄開いてゐた瞼が自然に閉ざされると、そら、其處に立つてゐる蕃人の彫像の黒い影が網膜に印せられて、これが白い映像となつて浮かび出して來る。彫像の横に下つてゐ蕃刀が彫像の手元に飛び込んで來て、巨大な怪物が白刃をひらめかして突進して來るやうな錯視といふのか、そんな一つの偶像が網膜に反映して、其の他附近にある雑多なものが、色々な角度、種々雑多な形状をもつて、恐ろしい一箇の怪物を作り出して來る。（p.258）

つまり、「熟蕃」の末裔である潘吉祥は、自らの祖先の過去の「罪」——自らのルーツが「生蕃」であったことによって幻影を見、「椅子」に殺されそうになるのである。先述したように、1931 年の時点で移川子之蔵は「熟蕃」の人々が「熟蕃と認識さるゝことすら嫌ふ」（p.137）と述べていた。なぜならば、彼らは自分たちが、「内地人」でもなく、「漢人」でもない、以前は「蕃人」（「生蕃」）であり、現在でも「非漢人」という境界線上に存在しているのだと自己認識していたからである。つまり「魔の椅子」では、その「罪」が「恐怖」の幻影となり潘吉祥を襲ったのである。

「魔の椅子」では、迷信を打破し吉祥の死を救ったのが真田九郎の「近代的知性」であることは書かれている。しかしながら、それは福田によって「近代的知性」の優越性を誇示するために「利用」

[33] また、物語では真田九郎の「近代的知性」により椅子が実は価値のあるものであったことが判明する。

臺灣大學學術期刊資料庫

されているのみであり、そこに存在する差別を告発するといった視点は全く存在していない。

3.「魔の椅子事件」における作者／読者の欲望

それでは、この「魔の椅子」という物語は、いかなる作者／読者の欲望を示しているだろうか。一つには、筆者はそれが「近代的知性」の優越性の誇示、肯定であることに間違いが無いと考える。また他にも、それが当時の作家／読者の「蕃人」(「生蕃」「熟蕃」を含めた)[34]に対する不安や恐怖に関係しているのではないかと考える。

先述したように、1930 年代の台湾は近代化が進んだ時期であった。1935 年、施政 40 周年記念台湾博覧会が開かれ、そこで台湾先住民族はその生活を展示された。つまり、彼らは植民地政府により、「馴らされ」、見られる客体となったのである。観客たちは彼等を安全な場所から、「観察」することができた。結果、彼らの「蕃人」に対する恐怖は薄れたとも言えよう。しかしながら 1930 年に起きた霧社事件以後にも、「魔の椅子」が発表された 2 年前には先住民族の抵抗(「逢坂駐在所襲撃事件」)が発生していた。さらに、先住民族が関連した殺傷事件は 1935 年や 1938 年にも発生しており、1941 年にブヌン族が駐在所を襲い、巡査を含めた 3 名が死亡するという内本鹿事件が起きている[35]。

管本康之は「探偵小説、群集、マルクス主義—平林初之輔の探偵小説論」の中で、読者は探偵小説を読むことにより自分たちを不安に陥れ、恐怖させるものが何であるか解読でき、それらを支配することができる、と述べている[36]。このように考えれば、「魔の椅子」

---

[34] 「魔の椅子」の物語は、「熟蕃」である潘家が、家の中に「生蕃」の事物を有しているという構造がとられている。そのためここでは「生蕃」と「熟蕃」に対する不安という表現を用いた。

[35] 著者不明「カウ社蕃人殺害事件漸く解決す」(臺灣總督府警務局理蕃課編『理蕃の友』臺灣總督府警務局理蕃課、台北：1935 年 8 月)、著者不明「悲恋にまつはるピヤハウ事件」(臺灣總督府警務局理蕃課編『理蕃の友』臺灣總督府警務局理蕃課、台北：1938 年 12 月)、台湾総督府警務局「内本鹿ブヌンの凶行」(臺灣總督府警務局理蕃課編『理蕃の友』臺灣總督府警務局理蕃課、台北：1941 年 4 月)。上掲 3 論文は原文に著者名が記されていなかった。

[36] 管本康之「探偵小説、群集、マルクス主義—平林初之輔の探偵小説論」『日本近代文学』第 59 集（1998 年）pp.78-79。

臺灣博碩學術期刊資料庫

が示している作者／読者の欲望とは、次のように言えるのではないか。つまり 1930 年代、作者／読者は「近代化」された植民地台湾で生活をしていた。しかしながら、彼らはどこかに存在するかもしれない「蕃人」への不安に恐れを感じていた。それら不安は、報道や博覧会というイベントにより解消されているはずであった。しかしながら、心の中には未だ「未知なる物」「野蛮」が潜んでいるかも知れないという恐怖があったのである。そしてこのような不安を、福田は探偵小説という形式を以って解消しようとした。つまりこの物語が示すように、台湾が近代化された 1930 年代に至っても、作者／読者は、探偵小説――真田の「近代的知性」を以って「野蛮」を「飼い馴らす」必要があったのである。

また「魔の椅子」では、語り手であり真田の友人で会社の「私」は、物語の中で井戸に落とされる。ちなみに福田昌夫は「若き者の領域」9 回目において、ヒロインが見た悪夢から、フロイトの精神分析に言及し、その夢の分析に多くの紙幅をさいている[37]。つまり、当時から福田昌夫はフロイトの精神分析学に関する知識を有していたことがわかる。このことから考えれば、語り手であり、真田の友人の「私」が落とされた井戸とは、彼自身の id（イド：快楽原理、欲望）――潘氏愛への欲望（彼女への愛とそれゆえの憎しみ）を吐き出すための空間であったとも言えるのではないだろうか[38]。彼は物語の結末で、潘氏愛と恋に落ちることが示唆されている。この結末が意味するものは、日本人（「内地人」）である作者、そして日本人（「内地人」）読者の植民地エキゾティシズムに対する欲望であることは明らかだろう。物語の最後で、語り手の「私」は「熟蕃」の

[37] 福田昌夫「若き者の領域」（中島利郎編『「台灣鐵道」作品集（二）』、東京：緑蔭書房、2007 年）pp.70-72。

[38] フロイトが id について言及したのは 1923 年の「自我とエス」である。フロイト著、本間直樹ほか訳『フロイト全集 18』（東京：岩波書店、2007 年 p.20）を参考とした。フロイトによれば、人間の精神構造は「id・自我・超自我」から成っており、id とは、快楽原理であり欲望であり、精神エネルギーの源泉にあたる。その id の上に存在して、理性的に id をコントロールするのが自我である。真田の友人「私」は、自我（社会生活における理性）の統制を逃れた深層――井戸（id）に落とされることにより、その中で普段では見せることのない潘氏愛に対する愛情や、その裏返しとしての憎しみを露にする。

臺灣學學術期刊資料庫

家庭から、彼女を「救い出す」のである[39]。

五、「港町の殺人」について

(一)「港町」の舞台

最後に「港町の殺人」について考えてゆきたい。先述したように「港町」は、1935 年の『台湾鉄道』4 月から 6 月の 3 回に渡って掲載された探偵小説である。この作品が、これまでに分析を行った二作品と異なる点は、探偵が登場せず、事件を捜査、解決するのが日本人(「内地人」)の警部、つまりは警察権力/公的権力であるということである。また、事件を起こす犯人も日本人(「内地人」)、そして被害者も日本人(「内地人」)であることは、「二将軍」「魔の椅子」と異なっている。

「港町」では明確に地名が示されていないものの、本文中で被害者の男性が「年齢二十四、五歳の内地人」(p.196)と記されていること、また熱帯地方特有の植物である「榕樹(ガジュマル)」(p.211)が描かれていることから台湾であると考えられる。また本文中には事件現場付近の地図が附されており、地図上には「朝日通り」「朝日橋」「濱町通り」「大和橋」といった具体的な地名が記されている。これら地名は位置関係的には異なるものの、それぞれ日本統治時代の基隆に実在している。また、事件を担当する竹村警部が所属するのが K 署であること(K は「きいるん」の頭文字を指しているのではないだろうか)、港に南洋貿易船の出入りがあることも、筆者が「港町」の舞台が基隆と設定されているのではないかと考える理由である[40]。物語内の時間については、本文中に大衆化したカフェーが登

---

[39] 「魔の椅子」は福田の多忙により打ち切られた。「魔の椅子」の事件は真田によって解決するが、潘吉祥が事件の後、どうなったかのかについては描かれていない。

[40] 当時、台湾で南洋貿易が盛んに行われていたのは基隆と高雄である。「港町」に登場する生駒丸や佐田丸が基隆や高雄で貿易を行っていたという資料は見つからなかった。しかしながら、生駒丸は内地群島間航路において使用されていた。また佐田丸については船舶の存在自体が確認できなかった。当作品における地名、船名などの使用方法から見て、福田は物語の舞台を基隆と設定したものの、その正確性を求めなかったため、具体的都市名を使用せず「港

臺灣大學學術典藏資料庫

場していることから、1930 年代をその背景としていることがわかる。

ちなみに 1930 年の基隆市は、人口 74,525 人（内地人 18,438 人、本島人 51,898 人、朝鮮人 118 人、中国人 4,071 人）、総人口が台湾島内で 3 位、また内地人人口は台北についで 2 位であった。翌 1931 年のデーターを見ると、基隆には、銀行・組合 10 社、会社 40 社、各種団体（呉服商組合、医師会など）60 団体、商店も 95 店舗あり、当時の台湾において大都市だったことがわかる[41]。

（二）近代と時間

以上に見たように「港町」は「二将軍」「魔の椅子」とは異なり、日本人（「内地人」）社会を舞台としており、物語も近代化された都市（おそらく基隆）の中で起こる。そして「港町」を一読してわかることはこの作品には、他の作品に比べて「時間」、「時計」というものが事件の謎を解く重要なポイントとなっていることである。テクストには犯行時間、各登場人物のアリバイの時間といったものが詳細に記されている。そして、加害者田邊俊吉は、宿舎の掛け時計に細工をし、時間を三十分遅らせるというトリックを用いる。

西本郁子は 1920 年代頃から、日本において時間厳守が奨励され始め、それが子供の読み物にも影響を与えたと述べている[42]。ちなみに日本統治時代の台湾でも、時間の観念を普及させるため、1921 年から時の記念日が実施された。また日本では 1933 年から 1939 年まで『少年倶楽部』に、田川水泡の「冒険ダン吉」という漫画が掲載されていた。「冒険ダン吉」のあるエピソード（1934 年 4 月号）で、ダン吉は南の島を制圧して現地で王様になる。ダン吉は現地の人たちに何か良いことをしようと考え、時間の規律を守ることを教えるのである（現地人は黒人として描かれている）。そして漫画の中で彼

町」としたのだと考えられる。海運貿易新聞台湾支社編『台湾海運史』（東京：大空社、2012 年）などを参考とした。

[41] 石坂荘『おらが基隆』（台北：株式会社台湾日日新報 1932 年、pp.13-14 および pp.70-85）を参考とした。

[42] 西本郁子「子供に時間厳守を教える―小学校の内と外」（橋本毅彦ほか編『遅刻の誕生―近代日本における時間意識の形成』、東京：三元社、2001 年、pp.181-183）を参考とした。『冒険ダン吉』のエピソードについても、西本論文を参考にしている。

臺灣大學學術期刊資料庫

と現地人が明確に描き分けられているのは、彼の腕には常に腕時計が巻かれていることなのである。つまり西本が述べるように「時計そして時間厳守の態度は、いわば文明そのものであった」（p.183）。

これまでにも見たように「二将軍」「魔の椅子」は、探偵真田が「近代的知性」によって「非文明」「旧社会」「法の外」で起きた事件を解決していた。その解決が共通して導き出すものは、秩序の回復、および「文明」「近代」「法」の優越性であった。「港町」の事件においても、基本的には犯罪者は逮捕され、乱された秩序が回復することに変わりはない。しかしながら、「港町」において特別なのは、日本人（「内地人」）の田邊俊吉が、近代的都市の中で、文明を代表する「時計」という道具を利用して、自ら犯罪を行うことである。これは「二将軍」「魔の椅子」において、台湾人（「本島人」）社会や「熟蕃」部落で事件が発生するが、その事件が静的であり、常に真田の「近代的知性」による解釈／解決を待っているのとは決定的に異なっている。「港町」の物語の最後、田邊俊吉から自白を引き出した竹村警部は、田邊俊吉を評して「ああ云ふ**理知的な、冷静な男**」（p.212：強調部筆者）と述べる。このような描写からは、福田昌夫が日本人（「内地人」）社会で起こった犯罪を描く際に、意識的無意識的にかかわらず犯罪および犯罪者の描写に「近代性」を書き込んでいたと言えるのではないだろうか。これも作者／読者が有した、自分たちが「近代」や「文明」に属する――近代的都市空間に住む――ことへの優越性、彼らの持った欲望であると言えよう。

（三）都市空間－「内部」と「外部」

それでは「港町」では、なぜ探偵真田九郎ではなく、公的権力である竹村警部が事件を解決することになるのであろうか。また、「港町」の事件には、他にいかなる作者／読者の欲望が表されているだろう。ここでは、まず「港町」においていかなる場所で犯罪が発生したのかを考えてゆきたい。

前田愛は小説の中に描かれた場所と、そこからの越境について、

臺灣大學學術期刊資料庫

ユーリー・ロトマンの理論を引用しつつ次のように書いている[43]。

> この組織され、構造をもつ〈内部〉と、未組織で構造をもたない〈外部〉という対立項は、ロトマンによれば、文化と野蛮、インテリと民衆、コスモスとカオス、というようにさまざまな文化テクストにおいて可変体として読みかえられるという。文化テクストの二次的テクストとしてつくりだされる文学作品の場合は、城壁で囲まれた都市とその外にひろがる広野、金持ちたちが住む都市の中心部と貧乏人たちが住む場末、といった対立項が考えられるだろう。（p.40）

このように見れば、「二将軍」「魔の椅子」が、基本的には「近代社会」（「文明」）と「旧社会」／「熟蕃部落」（「野蛮」）といった二つの場所、そしてその越境とを基本的な物語構造としていたことがわかる。しかしながら、「港町」はすでに近代化された都市内部で事件が発生しており、一見このような越境は存在しないように思われる。しかしながら、物語を読んでゆくと、事件が起こるきっかけに、二つの場所が関係していることがわかる。一つは遊郭（田邊の友人松本芳郎は、遊廓に出入りすることからトラブルに巻き込まれる）であり、もう一つは増田主任の家（田邊俊吉はそこで増田夫人と逢引をしており、松本芳郎からそれを口外されるのを恐れて、松本を殺害する）である。

前田愛は、江戸時代における都市空間の研究をする中で、遊廓や芝居町が定住民の日常生活を脅かす「反乱の場」であったこと、しかしながらそうした場所・機能は幕藩体制そのものによって保証され管理されていたことを分析している[44]。つまり遊廓や芝居町とは権力によって管理された都市空間の〈内部〉に存在する〈外部〉――非日常の空間なのである。そこは、日常的な世界（ケの世界）から離れた非日常の世界（ハレの世界）――「強力な禁忌、隠微な曖昧

[43] 前田愛『都市空間のなかの文学』（東京：筑摩書店、1992 年 pp.38-43）を参考とした。ロトマンは小説の構造を内的世界と外的世界に分け、その境界線を越える人物を主人公であるとしている。
[44] 前掲、前田愛『都市空間のなかの文学』（1992 年）pp.68-69。

臺灣大學學術期刊資料庫

さ、無秩序、不浄性」を表すエロスとタナトスの空間であると言える[45]。「港町」について言うならば、遊廓はもちろん、田邊が逢引をしていた増田の家も、無秩序やエロス・タナトスを表す非日常の空間であると言えよう。

このように見れば「港町」とは、田邊俊吉と松本芳郎が、都市空間の〈内部〉における〈外部〉、エロスとタナトスの空間に足を踏み入れたことがきっかけで、犯罪が発生する物語なのである。さらに言えば、「港町」の事件が、このような都市空間の〈内部〉にある非日常空間で発生したため、福田昌夫は探偵真田九郎の能力が必要ではないと考えたのではないだろうか。そこには公的権力が手に負えないような「未知なる外部」は存在していなかったのである。

以上に見たように「港町」は、都市空間〈内部〉に存在する〈外部〉に接することにより事件が発生し、それを公的権力が解決する物語であった。それが示すものは都市空間に存在する〈外部〉への接触の危険性の告発、近代社会における秩序の再確認であるとも言える。また、馬場伸彦が述べるように、近代の都市空間とは、距離を置き観察する、未知の領域を安全にかつ直截的に「見たい」と欲望する窃視の空間でもあった[46]。そこには読者の犯罪に対する不安と共に、未知なる物やタブーへの好奇心が存在している。つまり「港町」とは、「近代的知識」の優越という作者／読者の欲望の他にも、近代的都市空間に属することの優越性、そこに存在する〈外部〉との接触による危険性と不安、そしてそれを安全に見たいという作者／読者の欲望を描いた物語であるとも言えるだろう。

六、おわりに

本論文では、台湾鉄道協会の機関紙『台湾鉄道』に 1930 年代に掲載された福田昌夫の小説「二将軍の壁画」「魔の椅子事件」「港町の殺人」を中心に、通俗小説が持つ作者／読者の欲望について考察を

[45] 同上。
[46] 馬場伸彦「探偵するメディアと近代」『アリーナ』第 2 号（2005 年）p.130。

臺灣大學學術期刊資料庫

行った。作品の分析にあたっては、3 作品の物語の背景となっている 1930 年代台湾の社会背景・文化的状況を重視した。

「二将軍の壁画」の分析からは、なぜ探偵真田九郎が両義的なパーソナリティーを持たなければならなかったのか、そして作中において福田昌夫がいかに「近代化」「文化」「近代的知性」といったものの優越性を描いているかを読み取ることができた。また「魔の椅子事件」の考察からは、潘家で起きた事件は、彼らが「熟蕃」の末裔であることが関係していることが理解された。他にも「魔の椅子事件」の分析からは、近代化が進んだ 1930 年代の台湾においても、当時の作者や読者は「未知なる物」「野蛮」への不安を常に感じており、それを探偵小説という形式を以って解消する必要があったことがわかった。そして「港町の殺人」の考察からは、都市空間で起こった犯罪と犯罪者に「近代性」が書き込まれていることが理解された。近代化した都市空間において、作者や読者は、都市空間の〈内部〉に存在する〈外部〉への不安とそれを安全に「見たい」とする欲望を持っていたのである[47]。

これまでにも述べられているように、確かに福田昌夫は通俗小説といった「肩のこらない」作品を描いていた。しかしながらそこに描かれた内容は、1930 年代から 1940 年代という日本統治時代の台湾に暮らした日本人（「内地人」）の作者／読者の、ある種の共通した欲望、そして幻想を表していると言えよう。

参考文献（年代順）

著作

石坂荘（1932）『おらが基隆』株式会社台湾日日新報

台湾総督府鉄道部編（1940）『台湾鉄道要覧－昭和 15 年 3 月版』台

[47] 福田昌夫は 1930 年代、本論文で取り上げた 3 作品を発表した後、1936 年に「山は裁く」（1 月－7 月）、1939 年に「返討隅田堤」（5 月）と「男の感情」（7 月－9 月）、1940 年に「若き者の領域」（1940 年 1 月－1941 年 1 月）、1942 年に「女性よ！太陽の如く」（1942 年 1 月）、「亜細亜の土」（1942 年 3 月－10 月）といった作品を発表している（以上の作品は全て『台湾鉄道』に掲載）。

臺灣大學學術期刊資料庫

湾総督府交通局鉄道部
前田愛（1992）『都市空間のなかの文学』筑摩書店
河原功（1997）『台湾新文学運動の展開』研文出版社
内田隆三（2001）『探偵小説の哲学』岩波書店
笠井潔（2002）『探偵小説論序説』光文社
佐藤卓巳（2002）『『キング』の時代－国民大衆雑誌の公共性』岩波書店
曽山毅（2003）『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社
中島利郎編（2007）『「台灣鐵道」作品集（一）』緑蔭書房
中島利郎編（2007）『「台灣鐵道」作品集（二）』緑蔭書房
フロイト著、本間直樹ほか訳（2007）『フロイト全集 18』岩波書店
海運貿易新聞台湾支社編（2012）『台湾海運史』大空社
廖怡靜（2012）『女給時代』東村出版
松田京子（2014）『帝国の思考』有志舎

論文

移川子之蔵（1931）「頭社熟蕃の歌謡」南方土俗學會編『南方土俗』新高堂書店 p.137
著者不明（1935 年 8 月）「カウ社蕃人殺害事件漸く解決す」臺灣總督府警務局理蕃課編『理蕃の友』臺灣總督府警務局理蕃課 p.11
著者不明（1938 年 12 月）「悲恋にまつはるピヤハウ事件」臺灣總督府警務局理蕃課編『理蕃の友』臺灣總督府警務局理蕃課 p.3
著者不明（1940 年）「本誌を慰問に」台湾鉄道協会編『台湾鉄道』340 号、台湾鉄道協会 p.61
台湾総督府警務局（1941 年 4 月）「内本鹿ブヌンの凶行」臺灣總督府警務局理蕃課編『理蕃の友』臺灣總督府警務局理蕃課 p.3
藤井省三（1995）「〈大東亜戦争〉期の台湾における読書市場の成熟と文壇の成立―皇民化運動から台湾ナショナリズムに至る道」下村作次郎ほか編『よみがえる台湾文学―日本統治期の作家と作品』東方書店 pp.84-88

臺灣大學學術期刊資料庫

管本康之（1998）「探偵小説、群集、マルクス主義―平林初之輔の探偵小説論」『日本近代文学』第 59 集 pp.78-79

西本郁子（2001）「子供に時間厳守を教える―小学校の内と外」橋本毅彦ほか編『遅刻の誕生―近代日本における時間意識の形成』三元社 pp.181-183

詹素娟（2004）「日治初期臺灣總督府的熟番政策－以宜蘭平埔族為例」『臺灣史研究』第 11 卷 1 期 pp.74-75

荻野雄（2004）「探偵小説の哲学（1）－ジークフリート・クラカウアーの出発点」『京都教育大学紀要』（105）p.41

荻野雄（2004）「探偵小説の哲学（2）－大衆文化の解読」『京都教育大学紀要』（105）p.54

馬場伸彦（2005）「探偵するメディアと近代」『アリーナ』第 2 号、中部大学国際人間学研究所 p.130

中島利郎（2007）「雑誌「台灣鐵道」解説」中島利郎編『「台灣鐵道」作品集（一）』緑蔭書房 pp.379-392

洪郁如「植民地台湾の「モダンガール」現象とファッションの政治家」伊藤るり他（2010）『モダンガールと植民地的近代』岩波書店 pp.261-267

横路啓子（2014）「植民地台湾的探偵小説論―福田昌夫を例に」『日本語日本文学』第 42 輯 pp.53-66

資料

台湾総督府統計書（1912-1939）『台湾総督府第十六統計書』～『台湾総督府第四十三統計書』台湾総督府

戴文鋒「賜姓政策」『臺灣原住民族歷史語言文化大詞典』http://210.240.125.35/citing/citing_content.asp ?id=1823&keyword=%BD%E7%A9m%ACF%B5%A6（2015 年 2 月 10 日閲覧）

臺灣大學學術期刊資料庫